

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人 小羊学園

〒431-1304

静岡県浜松市北区細江町中川7440-1

電話：053-437-0826 FAX：053-437-0849

E-mail kohituji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30 円

2008年9月20日

第 306 号

支援センター わかぎのあゆみ

支援センターわかぎ

施設長

松原康好

若樹学園開設当時は、緑に囲まれたのどかな環境にあり、ほぼ二十歳前後の若い利用者の皆さんでの生活が始まりました。近くを散歩するにもまだ舗装されていない車の通行もほとんどない田舎の道を楽しく散歩していました。今では、周りの道路も整備されて通行する車両からも障害者施設の存在を知ってもらえるようになってきました。

支援センターわかぎでは、健康維持のために散歩など身体を動かすことも行ってきましたが、施設内での農園芸、工芸、木工などの作業班活動にも取り組んできました。その後、二十四時間同じ敷地内での生活に変化をつけることを模索していたところ、土地を借用できることになり、施設外での木工作業を中心とした作業班活動の取り組みが始まって、毎日十五名程度の利用者が通う「工房わかぎ」がスタートしました。

この背景には、住む場所、通う場所そしてそれらを支援する体制を検討していく中で、地域の皆さんの大きな理解を得ることができたことがあり、その後の浜北地域で施設の役割を果たし

ていく上での道筋を描くことができるものであったと思います。

こうして通う場所ができると、次は住む場所について、利用者の気持ちは少しずつ変化し、小羊学園の近くにあった学生寮を譲り受け「温心寮」での生活を始めることになり、福祉的就労ですが、働く場所ができたことは、施設での生活では得られない利用者本位の生活支援へと繋がりました。温心寮の運営は、その後青年寮に移っています。また、「工房わかぎ」では、地域の中にある作業場として、在宅の障害者の中活動の支援にも取り組んで、地域の中の施設としての役割を担うこととなりました。

その後は、それまでの措置制度から、福祉のサービスも契約して利用する「支援費制度」がスタートし、一人ひとりに合った支援の内容を考えて、サービスの内容、質、量を検討していくことが求められ、そこには我々支援者側にも大きな課題を与えてくれました。そして、サービスの内容を再検討すると共に職員の資質の向上を図ることを目的として施設内研修グループ「施設生活」「自立生活」「地域生活」で研修を重ねてきました。

自立生活研修では、グループホームの開設を目的とした研修から、支援センターわかぎの利用者五名が新築した「ひまわり」に移り、新しい生活が始まりました。

そして、「障害者自立支援法」が施行されて「ひまわり」も新体系の「共同生活介護」として再スタートしてきました。そこで、彼らの日中活動の場を確保しなくてはならず、デイサービス事業の「オリーブの樹」に所属して活動することになりました。

この「オリーブの樹」も地域生活研修から、在宅の障害者のための日中活動の場として開設に至った施設です。現在は十八名の利用者が、空き缶リサイクル作業や製パン作業に取り組み、地域の皆さんが安心して活動ができるように支援をしています。

施設生活研修では、平均年齢が五十歳を過ぎようとしている利用者の支援の仕方に検討を重ね、いろいろな作業製品の製作から、趣味的な制作活動へと交わって、一日一日が有意義で楽しく過ごすことのできる環境を整えていくことで、一人ひとりが安心できる生活を目指して努力しています。

こうした浜北地域での支援センターわかぎを中心として活動を展開するために、地域社会の障害者福祉に対する大きな理解と、協力を得ながら進めてきました。わかぎフォーラムとして始めた「浜北フォーラム」などでの障害者福祉の啓蒙を含めた、施設機能の紹介や地域のニーズを把握しながら、地域の中の施設としての役割を果たしていくかなければならないと思っております。



支援センターわかぎ創立 30 周年祝賀会より

これからの
「わかぎ」について
思いつくこと

節目を迎えて

わかぎ保護者の会
会長 鈴木 照義

小羊学園から分離して三十年、今尚わかぎの施設設計については、その斬新的な考え方が高く評価されていると言われています。そのような環境の中で生活してきた入所者の人達は幸せであると思います。また職員も小羊の理念を実践し、誰からもうらやまれる施設として築きあげた三十年はその苦難を払拭するに値するものと思います。

変化する福祉制度の下、次の節目に向けて新たな希望を胸に困難に立ち向かい、地域や社会からの要望を満たしてくれるものと切望いたします。

5Sの精神

人は年と共に加齢し物は老朽する。これは自然の節理です。そんな中、人は健康を保つために食事に気をつけ、適度な運動をすることで、その間際まで元気でありたいと願っています。建物も良く手入れされたものは何年経っても気持ちよく、安らぎを与えてくれます。わかぎでも職員が傷んだ部分を補修していただき、機能維持に努められていると聞き頭が下がります。限られた人数と時間の中で、清潔清掃に努めることは無理かも知れませんが、大切な事だと思えます。新しいうちは清掃にも精一杯の努力をするも、年と共におさなりになりやすい。でも気持ちよく生活するには、一番大切な事ではないでしょうか。

加齢と住環境

若樹学園発足当時は青年であった人も、三十年を経過すると程度の差こそあれ、身体機能の低下は職員の努力にもかかわらず、どうする事も出来ません。支援の内容によっては、非常に重労働を強いられている面も多々あるものと思います。近い将来、加齢した人達や、身体機能の低下した人達も、安



付加価値と人の力

心して安全に過ごすことが出来る、住環境の整備された施設に生まれ変わる事を切望いたします。

人間の能力は、環境や仕事の変化に応じて変化し、泉のように無限の発展をするものかも知れないが、人間が仕事に発揮できるのは、その一部の能力であることを忘れてはならない。

そこで、仕事をいかに考え、いかなる方法で処理し、しかもその仕事にどれだけの意欲を燃やすかが重要で、「付加価値は仕事の考え方・やり方・やる気で決まるものである」。以上は本からの抜粋であるが、限られた資源（人・物・金・情報）も人の力（能力）を發揮することで付加価値の高い仕事にする事につながると思っています。支援センターわかぎの更なる発展を祈ります。



支援センターわかぎの
三十年と浜北の今後

オリーブの樹 鈴木 龍一

私がまだ五歳の時にわかぎが誕生した。当時私は、浜北の芝本という所に住んでいた。その後、貴布祢に引越して北浜小学校に入学、三年生まで通って浜松に転校した。それから三十年が経ち……。私は今浜北で働いている。偶然なのか、運命的なものを感じる。三十年と一言で言うとは簡単だがそれには長い歴史がある。支援センターわかぎも長い歴史を作ってきた。私が知っているわかぎの歴史はほんの少しいが、随所にその歴史の重みを感じる。その一つが工房わかぎだ。

工房わかぎが平成三年に誕生し、十七年経った。今ではオリーブの樹として通所施設にまで発展している。工房ができた時は「利用者と施設外で仕事をしたい」という職員の強い思いから始まったそうだ。しかし、今では利用者にとって『工房』は生きがいでもあり、楽しみでもある場所となっている。地域の方々もその工房での利用者の活躍を見て、通所させたいとの希望が多くなったのは事実である。通所されている若い子たちにとって工房で働いているわかぎの利用者は、良い人生の先輩でもあり、お手本となっている。その先輩たちを見ながらオリーブの利用者は成長していくのだろう。



浜北地区の障害福祉はこれから大きな節目を迎えるだろう。わかぎが三十年を迎え、新体系移行と改築に向けての準備を行なっている。また、浜北特別支援学校が平成二十一年度より県立になることにより、地域での施設の役割が重要になってくる。オリーブも同じように在宅者に対する支援は更に重要になってくるだろう。わかぎの今までの歴史、浜北地区の歴史を大切に新しい時代を切り開いていく事が、若い世代に求められているのだと思う。工房も同じだ。いつかオリーブの利用者が花台を作る日が来るかも知れない。わかぎ・オリーブのこれからに期待したい。

小羊学園
夏期デイ・ニッパ
大学をお借りして夏休み支援

アグネス相談員 本宮 早奈映

毎年ゴールデンウィークを過ぎた頃から、特別支援学校や特別支援学級に通われているお子さんの保護者より「約四十日もある夏休みをどのように、過ごしたら良いだろうか」という相談が多くなってきます。一般には子どもたちにとって楽しみである夏休みですが、子ども同士で遊びに出かけたり、家で上手に過ごしたりすることが難しいお子さんがいるご家庭にとっては、休む間もなく四十日間が長く長く感じられることと思います。

家族でお出かけしたり、ヘルパーの方とお出かけをしたり、学校のサマースクールに参加したり、日中一時支援事業を利用したり、それぞれ工夫しておられますが、福祉サービスに関しては利用できる量も場所も充実しているとは言いがたいのが現状です。例年、小羊学園では、小羊デイケアホームの夏休み期間に、場所を借りて、児童対象の夏期デイサービスを行ってきました。しかし、例年、希望の半分も受け入れができません、何とか改善したいと思っていました。

そんな中、今年度、隣設する聖隷クリストファー大学に「こども教育福祉学科」が開設されました。近年、福祉と教育の連携については、良く言われることです。

その一つの形と障害児支援のニーズの充足が叶えられるのではないかと、いうことで、早速、大学の先生へ協力依頼をしました。あっという間に、場所やアルバイト、ボランティアだけでなくプログラムへの協力もしてくださることに、思いつきが現実になりました。

いよいよ大学の講堂や実習室を利用していただく形での小羊学園の夏期デイが八月一日からスタートしました。広々とした空間の中でアルバイトのお兄さん、お姉さんと楽しそうに遊びまわると、初めての場所や初めて友達に少々戸惑いを見せる子、大きな公園で思いっきり体を動かしている子、小羊学園のプールで気持ち良さそうに泳いだり水遊びをしたりする子、どの子の笑顔も夏の太陽と同じく眩しくてキラキラしています。

長い夏休みの中で、夏季デイの時間が、少しでも子ども達にとって、楽しい思い出となってくれればと思います。今回、聖隷クリストファー大学の皆様協力してくださったことにより、夏休みの子どもたちの居場所を一つ増やすことができたことに大変感謝しております。

小羊学園移転計画

9月30日に建物の引渡しを受けました。



経済的な課題は残りますが、新しい建物は無事完成いたしました。ここに至ることができたのは、ご支援くださる皆様のご厚情に支えられてのことと思っています。ありがとうございます。



小羊学園・移転改築計画にご協力ください

(口座名義)「小羊学園を支える会」

郵便振替口座 00890-4-45415

りそな銀行浜松支店 (普通) 040005

静岡銀行細江支店 (普通) 043483

必要があれば、募金をお願い(振込用紙)を、お送りいたします。下記へご連絡ください。

問い合わせ先：小羊学園

〒431-1304 浜松市北区細江町中川 7440-1

電話 053-437-0826

課題として、夏休みに限らず、日常的に居住地によって福祉サービスや資源にバラつきがあり、学校や通園施設以外に安定的に利用できるサービスや居場所が確保されていません、保護者の方・地域の方・医療・教育・福祉関係者等々が協力し、各地域で一人ひとりの子どもの育ちを支えあう体制を築いていくことができればと、切に願っています。



聖隷クリストファー大学の実習室を借りて夏期デイサービス

少し長めの編集後記

四十数年前、私自身も小学生でした。夏休みは子どもたちにとって自由な時間が多く、毎日兄弟や友だちと遊んで暮らしていたような気がします。しかし、朝の六時半に眠い目をこすりながらラジオ体操に行き、「夏休みの友」という課題集と絵日記がメインの宿題で、工作と自由研究に何をするか考えるのは、親子の最大の難関でした。今振り返ると、学校の夏休みの課題は、子どもたちの生活のリズムが乱れないことと、親子のふれあいのチャンスをつくることへの配慮だったように思います。

三十年前、私が小羊学園に就職した頃、小羊学園の夏休みは七月の後半からの二週間で、当時はほとんどの子どもたちが帰省しました。数名の子どもたちは学園に残りましたが、職員も十日間の夏休みがあり交替で休みを取りました。今から思えば、ご家庭ではこの二週間の休みをどのように過ごしておられたのでしょうか。その後、ご両親が高齢になり、夏休みにも帰れない人が増え、休みの期間も短くなりました。今、支援センターわかぎでは、平均年齢が高くなり、施設から指定した夏休みはありません。ご家庭の都合がよく、帰省できる人には、自由に夏休みを過ごしてもらって

います。

子どもたちが養護学校に通学するようになる、年齢の子供たちは、夏休みの期間は、日中も学園での生活になります。通学によって生活のリズムが保ち易い日常と違って、夏休みの期間、どのように過ごすかは子どもたちにとって大きな課題になります。それでもご家庭に比べると、まだ生活のリズムは作りやすいように思います。

遠い外国で開催されたオリンピックの競技もリアルタイムで見ることができず、大人たちの生活が大きく変わり、子どもの生活環境も同じように大きく変わりました。昔は夜九時を過ぎると子どもは寝る時間でした。障がいのある子どもには、一つひとつのことに相当の配慮が必要になります。生活のリズムを崩さないことへの配慮もなかなか難しいと思います。長い夏休みの間、子どもたちの生活のリズムが保てるよう、まだまだ大人たちの配慮が足りないような気がします。

先日、支援センターわかぎの三〇周年のお祝いを、ホテルコンコルド浜松にて催しました。当日に間に合うように原稿をお願いしたのですが、つぶえの発行が間に合いませんでした。編集者もまた、仕事のリズムが整わず苦しんでいます。おゆるしください。

次号は、児童寮・青年寮の移転工事完了の特集です。今度こそ頑張ります。皆さまの平安をお祈りします。(I)